

国際化と平成

工学部 市川忠男

帰国子女特別選抜テストで、アメリカ帰りの受験生を面接した。広島大学を選んだ理由を尋ねると、「国際・平和・文化都市」広島の国際化に将来貢献したいということである。「国際都市の国際化？ 国際化のこと英語で何というの？」と尋ねたら、「インタナショナルです」という。「それは国際的という意味でしょう。私が尋ねているのは国際化の英語なんだけど」というと随分と困った顔つきをした。

日本の外ではずっと昔から国際的な環境の中でもまれてきているから、もうとっくの昔から国際的なのである。とっくの昔から国際的なので、今さら国際化などという必要はない。必要がないからそういう言葉もないのである。それに比べて日本では、なんと政治家、役人から学識経験者に至るまで、まるで誇らし気に「国際化」、「国際化」の大合唱。大政奉還後100年をとっくに過ぎた今になって、まだ。

卒業生から「結婚しました」という通知を受けた。近頃、この手の通知には写真が使われることが多い。披露宴でのキャンドルサービスのスナップなど。これまで菓子箱の空いたのに無造作にほうり込んでおいたのだけれど、気づいてみるともう随分と沢山になっている。ひとつひとつ取り出して床に並べ始めた。

家内が「何してるの？」というので、「好みのタイプの順に並べてる」といったらバカにされた。もちろん評価の対象は新婦である。私は自分の美意識を確認するためのごくごく個人的な行為として、決して不健全なもので

はないと思うのだけれど、しかたがないから「彼と彼とどっちが先だったかな？彼の時にはああいうことがあったんだけど……」などと、いいかげんなことをいってその場を繕った。

そこで、今度は郵便局の消印などを頼りに挙式の年月順に並べ換え始めた。これが意外に難しい。なぜかという、郵便局の消印にも西暦と元号の2種類があって、両者の間で後先の判定をしなければならないからである。「昭和」と西暦の間を何度か行きつ戻りつしているうちに楽しいはずの行為に抑え難い苛立ちを覚え、そのうち「平成」が現れるに至ってとうとう脳みその大半が重苦しくさえ感じられるようになった。

しばらくして医学界の知人から医学の論文を頂戴した。折り返しさし上げた私の礼状は次のとおり。「記述が簡潔にしてかつ明快であることは分かるのですが、それでも私には何のことかさっぱり分かりません。ただひとつ感銘した点があります。それは、参考文献のリストの中で、日本語で書かれた国内発表の論文も英文のものと同じく発表年が西暦で示されていることです。……（後略）」

工学の分野では、どういうわけか日本語の文献には元号が用いられることが多い。日本の発表がはたして外国の発表に先行していたのかどうか、「昭和」だけでもその辺の見極めを難しくしていたのに、これからはその上に「平成」が混じってくる。まさに、外国産のアイデアに乗っかって日本語の世界の中で大きな顔をしようとする輩には都合がよさそうだ。私の身辺でも、事あるごとに「平成元年」

の乱発。これが妙に勘に障る。なぜだろう？
まるで場違いな祝詞のように響くからである。
どうしてそう響くのだろう？ きっと本人が
その気になっているからだろう。ついこの間、
「普段どっちを向いて飯を食おうが、それは
各人の勝手だけれど、業績評価などに使う資
料ぐらい西暦に揃えましょうよ」といったら、
なんと若い世代から「強制するのはよくない」といった妙な自由主義が飛び出してきて
面喰らった。

私は人一倍自由主義者だと思っている。だ
けど、今この問題については、「国内の業績
も国外でのそれとの関連の上で正しく評価す
べきであり、そのためには評価の基準なども
すべて揃えた方がいい」と考えているし、そ
のようにいったわけである。ところで、そう
いってみて気づいたのだが、ただそのためだ
けになら、外国文献の方の西暦を「昭和」と
か「平成」に変えてしまうのも一興だろう。

「国際化」のかけ声に踊らされて井の中の
蛙もやっとのこと大海へ出ようという気にな
った。その気になったとたん「平成」、「平
成」と井戸の底が掘り下げられる。これじゃ
いつになっても出られない。



国際化と平成。この二つの相容れない概念
が、タテマエとホンネよろしく共存し得ると
ころが我が国特有の精神的風土であり、この
風土があって初めて今日の社会的安定と経済
的繁栄が見られたのだろうけれど、外国人か
ら見れば、日本人の言動に対する不可解さが
いよいよ募るばかり。ヨーロッパ共同体構想
が進みつつある今日の国際情勢の中であって、
国際化と「平成」の延長線上で日本の将来を
イメージしてみても、明るいものは何も見え
てこない。

さて、それではどうすればいいのだろう？
「赤信号」って何なのか、そのことを各人が
独自に考えて、自分の考えに従って自分の責
任で行動する。場合によっては「一人で赤信
号を渡る」ことだってできるようにならな
ければいけない。このようにして日本人一人
一人が日本の外の人達と同じ言葉で話し合え
るようにならなければ、日本が国際的なかわ
りの上で信頼するに足る一つの存在として認
められるようにはならないだろう。

国際化「蛙飛び出す井戸の底

平成元年 深さ増し

